

# 素朴な宗教的感情に関する調査で考えたこと

東洋英和女学院大学  
元教授 林 文

## 1. はじめに

人々の日常の身近な事柄と生活習慣、伝統的価値観等にもみる素朴な宗教的感情について、標本調査をいくつか行ってきた。調査方法も調査対象も様々なレベルのものを含むが、連鎖的に考察した知見を述べたい。

日本人の国民性調査では、1958年の第2回調査から「信仰を持っているか」と「宗教的な心は大切なか」の2つの質問が用いられている。この発想自体が日本の宗教の特徴であるが、それについての国際比較から、宗教を信じていなくても、宗教的な心が大切と考える人の多いことが明らかになり、西欧のキリスト教社会からみた日本人の宗教信者の少なさが必ずしも宗教を否定するものではないことが示された。近年、WHOでもスピリチュアリティの重要性が注目されるなど、宗教の概念の見直しもなされるようになってきている。しかし、そのための調査をみると、西欧的論理から構築された概念を用いており、日本人が宗教的な心として捉えるものとは違った印象を受ける。日本人の宗教的な心にあたるものが日本以外の国や地域で存在するのか、存在するとすれば、どのような言葉で捉えることができるのか考えていく意味がある。1970年代の多次元解析法の開発とともに行われた基底意識の統計科学的研究や、森林に対する意識の国際比較、1990年代の日本人の自然観調査研究をとおして、筆者は素朴な宗教的感情に注目してきた。こうした「素朴な宗

教的感情」と生活全般（宗教観、生命観、人生観、生活の質）の洞察をさらに深め、文化の連鎖を日本のみならず他の地域を含めた分析へと発展させていくには、大規模な標本調査に基づく統計科学的研究の実証的調査研究が必要である。しかし現在は、基底意識構造に関する予備的調査として横浜市の一部に限定した郵送調査、首都圏のウェブ調査（2009年）などにとどまっている。

ウェブ調査を用いた理由は、これまでの郵送調査では回収率が3割強程度で、回収層には偏りがあると懸念されるため、それとは異なる回収層が予想されるウェブ調査も行って比較することを考えたことにある。ウェブ調査は、近年は簡単になされるようになってきているが、調査協力者登録集団（いわゆるボランティア・パネル）に対する調査がほとんどであり、母集団がはっきりしない。また、その登録者集団が各調査会社によって性質が異なり、異なる調査結果が得られることも知られている。ウェブ調査の技術的な面での具体的方法も、各社様々であるが、その異なる要因についての研究はほとんど行われていない。そこで、ウェブ調査の実施に当たって、比較条件の明確化を図った実験的調査計画を立て、複数社に共通の条件を提示し、実験調査であることへの了解を得て委託した。郵送調査はこれらと比較するため、同地域調査でほぼ同時期にほぼ同じ調査内容で実施した（統計数理研究所の「日本人の国民性の統計的研究

と国際比較」運営交付金による)。

これらの調査対象の違いおよび、調査方式の違いを検討することが可能となり、加えて、本調査研究が本来の課題としている素朴な宗教的感情を含む伝統的価値観についての調査項目の、現代社会における意味を考察することができた。こうした検討の中で、国際比較も視野に入れ、今後の変化を捉えていくため、調査項目のスキームの再構築を目指している。

## 2. 「宗教的な心は大切」という考えと素朴な宗教的感情

「日本人の国民性調査」(統計数理研究所ホームページ)は1953年から5年毎に行われてきた全国規模の調査で、2008年には第12次調査が行われている。この調査研究は、日本人の考え方の特徴を捉えるという目的を持つが、それと同時に、調査法の研究、調査データの解析の研究も主要な目的であり、これまで12回の調査だけでなく、その周辺で多くの試みの調査もなされてきた。生活全般にわたる考え方・意識・行動を調査内容としており、特定項目についての詳細な分析を目指すものではないため、役に立たない調査という批判もあるが、広い視野の中に諸相を捉えてきた。調査項目のいくつかは、長期にわたって継続調査されてきた意義は大きい。1970年頃から、国民性調査から国際比較調査に発展していくが、その第一歩は日本とアメリカの中間的存在としてのハワイ日系人調査(林知己夫他1973)であった。1990年前後には日米英仏独の5か国、次いで、オランダ、イタリアの計7か国調査が行われた(統計数理研究所国民性国際調査委員会1998)。2000年以降は東アジア、環太平洋、アジア太平洋地域価値観調査につながっている(吉野編

2006, 吉野編2010, 吉野他2011)。

日本人の国民性調査の質問領域として宗教に関する領域があり、そこで、西欧とは異なる日本らしい宗教観に注目した質問として、「信仰の有無」を尋ねる質問とともに、「宗教的な心というものを大切と思うか」を尋ねている。日本人で信仰を持つのは3割程度であるが、「宗教的な心は大切」という人を合せると7割に達するとして、日本人は信仰を持っていなくても、宗教的である、あるいは宗教を肯定的に捉えている、ということを示した質問である。「日本人の国民性調査」の第2次(1958年)調査から第8次(1993年)調査までは、こうした論議がそのまま継続しており、国際比較調査からも日本人の特徴として実証された(林知己夫・林1995)。しかし、「日本人の国民性」の1988年調査から20歳代の回答に大きな変化が見え始め、「宗教的な心は大切」の回答は若い年齢層での減少が大きく、「信仰なし・宗教的な心は大切」という意識は減少の一途と見えた。そしてまた1998年以降、2003年、2008年調査ではそれほど減少していない。

今後減少し、価値を失っていくかと思えた「信仰なし・宗教的な心は大切」という意識が、1998年以降低下していないことが示すのは、伝統を見直す風潮ということだろうか。若い世代の特に女性の占い好きの傾向は、女性向け週刊誌やファッション雑誌に掲載されていることから明らかである。占いなどは宗教とは関係がないとする考えもあるが、生きていく指針として、何かを信じないまでも気にしたり頼りにしたりする、という気持ちに注目したい。こうした意識を「素朴な宗教的感情」という言葉で表現した(林2006)。

3. 「あの世」「死後の世界」はあると思うか  
このような傾向を受けて、2008年の「日本人の国民性調査」でも、1958年(第2次)調査で用いられただけであった質問『あの世』を信じるか(“あなたは「あの世」というものを、信じていますか?”)を、尋ねている(中村編 2009)。1958年には「あの世」を「信じる」20%、「信じてはいない」59%であったのに対して、2008年には「信じる」38%、「信じてはいない」33%であり、明らかに増加している。中間の「どちらともきめかねる」は12%と23%で、「信じてはいない」と明言しないという意味では「信じる」の増加と同傾向といえることができるだろう(林 2010)。

「あの世」を「信じる」回答を年代別にみると、第2次(1958年)調査では「信じる」は年齢の高い層、「信じてはいない」は若い年齢層であったのに対して、第12次(2008年)調査では、若い層の方が「あの世」を「信じる」割合が高い。1958年(第2次)調査で20-34歳の層の人々は2008年(第12次)調査では70歳以上になっているから、「信じる」割合は13%から36%に増加しており、全体が「信じる」ように変化したといえる。信仰の有無と宗教的な心は大切と思うかどうかによる群別との関係は、1958年と2008年調査いずれも、「あの世」を「信じる」割合は「信仰あり」群で最も高く、「信仰なし・宗教的な心は大切でない」群で最も低くなっており、あの世を信じるかどうかは、信仰の有無と関係があることを示している。しかし、「信仰なし・宗教的な心は大切でない」という群で「あの世」を「信じる」のは、1958年にはわずかに4%、「信じない」が77%で、徹底的に宗教もあの世も否定する姿勢を示していたのに対して、2008年の同群では、31%

が「あの世」を「信じる」としており、「きめかねる」を含めればほぼ半数に達しているのである。「宗教的な心は大切でない」としながら、「あの世」を「信じる」あるいは「きめかねる(信じないとは言えない)」というのは、どういうことであろうか。単に「ない」の証明はできないと言っているだけかもしれないが、ないとは言えないところに、若い年齢層における素朴な宗教的感情が表れているとも考えられる。

既存の宗教への信仰とは別の何か宗教的なものへの関心を問うものとして、「神や仏」「死後の世界」「霊魂(たましい)」それぞれについて「あると思うか」という質問がある。回答選択肢は「ある」「あるかもしれない」「ない」であり、中間の「あるかもしれない」は、前述のように、あるとは言わないが否定もしきれないところにも意味があるという考えに基づく。この質問は「東アジア価値観調査」(2002年-2005年)、「環太平洋価値観調査」(2005年-2009年)でも用いられた(吉野編 2006, 吉野編 2010)。また、首都圏のウェブ実験調査「伝統的価値観と身近な生活意識に関する意識調査」(林 2011, 林・吉野 2011)でも用いた。これらの調査を抜粋して表1とした。東アジア価値観調査の2004年日本調査の「死後の世界」の回答は、前述の「日本人の国民性」2008年調査の「あの世」の回答と比べると、いずれも全国成人の層化二段抽出による面接調査であるが、少し異なっている。「あの世」を「信じる」38%よりも「死後の世界」が「ある」は19%と少なく、「死後の世界」が「ない」は26%で「あの世」を「信じていない」33%より少ない。しかし、それぞれの回答者の3分の2程度が、そうしたものを否定していないということは注目してよいだろう。

表1 「神や仏」「死後の世界」「霊魂」は「あると思うか」と「信仰と宗教的な心」

	国・地域 調査方式 調査年 回答者数	日本	北京	韓国	台湾	アメリカ	横浜市1	横浜市2	首都圏	首都圏
		面接 2004 1139	面接 2005 1053	面接 2006 1030	面接 2006 603	面接 2006 901	郵送 2006 248	郵送 2008 523	郵送 2009 316	ウェブB 2009 1067
信仰あり		28	14	54	65	79	34	20	20	19
信仰なし・宗教的な心大切		45	30	27	20	7	43	51	45	45
信仰なし・宗教的な心大切でない		15	47	13	12	11	19	26	24	31
信仰と宗教的な心その他		12	9	6	2	2	5	4	11	6
神や仏	ある	40	18	26	47	71	44	30	36	31
	あるかもしれない	41	25	28	32	21	43	48	43	46
	ない	15	54	36	9	5	11	18	17	22
	その他	4	3	10	2	3	1	4	1	1
死後の世界	ある	19	9	23	35	50	26	21	24	20
	あるかもしれない	45	21	28	45	33	51	45	49	50
	ない	26	65	36	14	13	20	29	24	28
	その他	10	5	13	5	4		5	1	1
霊魂(たましい)	ある	32	17	26	41	65	38	33	37	29
	あるかもしれない	43	24	34	45	27	51	49	47	49
	ない	18	56	29	9	6	10	14	13	21
	その他	7	3	11	5	2		4	1	1

#### 4. 素朴な宗教的感情

前節では、「宗教的な心は大切か」や「あの世はあると思うか」などの回答傾向を、素朴な宗教的感情の表れ方と捉えたが、自然観ともいえる意識も素朴な宗教的感情として考えることができる。1976年～1978年東京と米沢の「日常生活と習慣に関する調査」(個別面接聴取)、1993年全国と1994年東京の「自然観に関する調査」で取り上げられている質問のいくつかを、2004年、2006年の横浜市一部地域の郵送調査と、2009年の首都圏郵送調査、ウェブ調査で用いてみた。質問文が少しずつ変わり、対象範囲や調査手法も統一されていない調査結果であるが、これを表2に示す。

「日常生活と習慣に関する調査」(林編1979)(通称「お化け調査」)の1976年と1978年の東京調査(、)は、東京23区の20歳以上男女、層化二段抽出法による900人と616人を対象とし729人(81%)と499人(81%)の回収を得ている。1977年の米沢調査( )は米沢市とその周辺の20歳以上男女、層化二段抽出による400人を対象とし340人(85%)を回収している。「自然観

に関する調査」(林編1996)の1993年全国調査( )は、20歳以上男女、層化二段抽出の2000人を対象とした面接調査で回収1477人(74%)を得た。1994年は全国8地域の調査であるが、そのうち東京調査( )は東京30km圏の層化二段抽出1000人に対する留置調査で、686人(69%)の回答を得ている。2006年横浜調査( )は市内の4つの区で二段抽出200人ずつ計800人の郵送調査で回収は248人(31%)、2008年横浜調査( )はこれとは異なる4つの区で二段抽出400人ずつ計1600人の郵送調査で回収は523人(33%)、2009年首都圏調査( )は東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県の20歳から79歳の層化二段抽出による1500人対象で回収は369人(25%)である。ウェブ調査はこの首都圏20歳から69歳の各社登録者を対象として3社A、B、Cに比較実験調査として委託し実施した。ウェブ調査については別発表としたいが、各社パネルの違いが明らかになった。ここで示すのは、属性を除くほぼ全ての質問の回答割合が3社の中間であるB社のもの( )である。、は新情報センターに調査実施を委託した。

表2 宗教的感情についての調査結果

	調査名	「お化け調査」			「自然観調査」		「伝統的価値観調査」			
		対象地域 調査方式 調査年 回答者数	東京 面接 1976 729	東京 面接 1978 499	米沢 面接 1977 340	全国 面接 1993 1477	東京 留置 1994 686	横浜1 郵送 2006 248	横浜2 郵送 2008 523	首都圏 郵送 2009 316
a	神社の前で心が落ち着いたり、あらたまった気持ちになることがあるか 「はい」	%	%	%	%	%	%	%	%	%
b	お寺で仏像を見たり、お経を聞いたりしたとき、心が落ち着いたりあらたまった気持ちになることがあるか 「はい」	69	63	72			81	77	78	
c	キリスト教の教会に中で、心が落ち着いたりあらたまった気持ちになることがあるか 「はい」	22		12			49			
d	神社の拝殿の前に立ったり、お寺で仏像を見たり、キリスト教の教会に入ったとき、あらたまった気持ちになったりしたことがあるか 「はい」 [2008, 2009は、「キリスト教の教会に入ったとき」なし]				82	79		81		78
e	何か困ったとき『神様』とか『仏様』とか心の中で叫んだり、お祈りしたくなることがあるか 「はい」	60	56	62						
f	大きな古い木を見たときに、何か神々しい気持ちをいただくか 「はい」		57		77	78	70	68	68	68
g	深い森に入ったとき、何か神秘的な気持ちをいただくか 「はい」		53		73					
h	日の出や日没、また静かな山の中で、あらたまった気持ちになったことがあるか 「はい」 [横浜2006年調査は「日の出や日没、また満月の光に、」] [横浜2008年調査は「日の出や日没に、」のみ]				78	86	69	69		
i	山川草木、山や川や草や木など、すべてに霊がやどっているような気持ちになったことがあるか 「はい」	31	24	24	37	45	48	42	41	44
j	都会の近代建築や、最新の施設の中にも、何か霊的なものが宿っているような感じになることがあるか 「はい」 [横浜2006年調査は「都会の近代建築や、コンピュータなどハイテク機器の中にも、」]						9	10	14	19
k	神や仏をそまつにするとバチがあたると思うか 「はい」	50	56	57						
l	お米や食べ物をそまつにすると、すまないことをしたような気がするか 「はい」	88	87	87						
m	誰も見ていなくても、良くない行いをすると、バチ(罰)があたるような気がする。 「はい」						87	88	84	80
n	針供養などのように、使い古した身近な道具に感謝するために供養をしたいような気持ちになったことがあるか 「はい」		37	41		64	51	48	43	48
o	人間の自然開発の犠牲になったり、食糧になったり、実験に使われたりした動物に対して、感謝をささげたい気持ちになったことがあるか 「はい」				59	73				

調査の値は、20-69歳の316人の割合

質問 d は a, b, c を合わせた形であり、それぞれ試みとして変更使用した質問である。1976 年、1978 年の肯定的回答の割合と較べ、1990 年代の調査ではまとめると肯定的回答が多くなるとも読めるが、20 年間の時代変化とみることもできる。2000 年代の調査はどれも郵送調査で回収率が低いがいずれも 80%前後と、1970 年代の東京調査よりも 10%程度高い。回収率 30%と 80%の差の問題があり、横浜調査で回収できなかった 70%の対象者の肯定的回答割合が仮に 60%とするなら、全体の回答割合は 70%以下になってしまい、増えているとはいにくい。しかし、減ってもいけないのではないかと考えられる。横浜調査の「キリスト教の教会」は身近な存在に変化していることを示しているといえよう。質問 e については 1970 年代の調査しかないが、信仰ありが 3 割の日本で、6 割が肯定回答というところに素朴な宗教的感情が見えている。質問 f~i は自然観的宗教的感情であるが、これらも a~d で述べたと同様に、1970 年代調査より 2000 年代調査の方が 10%から 20%も肯定的回答割合が高く、増えているかは疑問であっても、減ってはいないと考えられる。質問 j は、一時オカルトブームなどもあり、自然観と同様の神秘感が近代的建築などにもあると感じられるのではないかと考えて尋ねたが、ウェブ調査で最も高い肯定回答割合であることはウェブ調査対象者の特質として興味深い。質問 k, l, m は対象が現実の具体的なものでない何かに対する感謝や謝罪などの感覚を尋ねている。質問 m の 2000 年代の肯定的回答割合の高さは注目される。日本人の美点として挙げられる「もったいない」に通じる素朴な宗教的感情と捉えている。質問 h, i, o では全国と東京都の比較ができ、むしろ都会において、自然

に対する素朴な宗教的感情を持つものが多いことが示されたものである。

## 5. 宗教に関連する郵送調査の問題点

前節で挙げた調査のうち、2000 年代の調査について、その調査の実施について考えてみたい。1970 年代の調査が東京 23 区の個別面接調査で回収率が 81%であったことは、今となっては夢のような話である。1990 年代の自然観調査は全国調査の個別面接聴取法で 74%、東京調査の留置法で 69%と調査の困難さが見えてきているが、まだ調査結果をそのとおり読んでもそう判断が狂うことはない。2000 年代になってからの本稿で挙げた 2006 年 2008 年調査は、筆者が直接に作業実施した試験的な意味の郵送調査である。その前の 2004 年には、ここには挙げなかったが米沢市で郵送調査を実施したが、回収率は 18%という低さであった。

まず、2009 年の郵送調査とあわせ、郵送調査の回収率について考察しよう。郵送調査の回収率について、条件によっては 80%近い回収が得られるという報告もあるが、これまでの経験では研究者が通常の課題について行う調査では、3 割から 4 割である。横浜市の 2 つの調査は、筆者所属大学所在地近い地域であったが、期待していた回収率には及ばなかった。宗教に関連する調査内容が敬遠されることを考えると、比較的常識的な範囲にはある。また、これに対して、同様の内容の調査に対して、米沢調査の 18%は非常に低い。この理由は、調査主体の所属大学名がほとんど知られていないためと考えている。また、2009 年の首都圏郵送調査も 25%と低めである。横浜市調査と首都圏調査の回収率の違いを次のように考えている(林 2011)。

- ・調査主体の違い・・・横浜市調査は、東洋英和女学院大学の林文の科研研究会、首都圏調査は、統計数理研究所の吉野諒三と林の共同研究として発信した。
- ・調査主体との親密性・・・横浜市調査は、横浜市内の東洋英和女学院大学に対する親密性があるが、首都圏では知名度が低く、統計数理研究所も同様である。
- ・発送封筒の違い・・・横浜市調査では、薄青、薄黄、薄桃の色封筒を用いたが、首都圏調査では茶封筒。
- ・返信用封筒の違い・・・横浜市調査では、A4サイズの調査票を折らずに入れられる封筒に返信用切手を貼ったが、首都圏調査では、3つ折りにして入れる長3サイズの封筒で、返信切手を貼らず、着払いとした。

以上のような理由が考えられるが、実際に何が効いたか確実なところは分かっていない。

宗教に関連する内容の調査の特徴として、対象者が拒否反応を起こす可能性があることである。調査票の最後に自由記述で調査に対する意見感想を求めているが、その中には、積極的に調査内容に関心を持ち、考えるきっかけになってよかったというものがある一方、調査主体がどこの宗教団体なのかという疑惑や、宗教について聞いてよいのかといった宗教という言葉に対する拒否反応を示すものも目についた。また、調査目的がはっきりせず、どう答えてよいかわからない、というものもあった。

余談となるが、この2008年の横浜郵送調査で、実は4つの区のうち1区の実施でミスがあり、回答期限を郵送日より前としたまま発送した。問い合わせにより葉書で訂正し改めて回答を依頼したが、回収率は他の区の38%、34%と較べて24%と低かった。

こうしたトラブルにも関わらず回答を得られる層に特徴があるのではないかと分析しているが、他区との比較では特徴を見出せず、しかも属性以外の回答割合でも、ほとんど他3区の値の範囲を超えていないのである。こうして、ミスからもある意味の情報を得たといえる。

ウェブ調査の比較実験調査については、報告書（林・吉野 2011）を参照されたい。

## 6. まとめ

調査質問項目は、過去の資料と現在の状況によって何が必要かを考えて構成するが、分量の問題もあり自ずと制限され、後になって非常に重要であった項目が落とされることも多い。社会調査は過去に戻ることができない。昨年3.11東日本大地震の前後で、自然感や人間のつながり感、宗教的な感情の変化があったかどうか問題とされるが、後に考える質問を前に行っていないと比較ができない。自覚的变化を捉えることになる。2012年2月には2009年ウェブ調査との比較も考えたウェブ調査（統計数理研究所とのオムニバス調査）を行い分析中であるが、素朴な宗教的感情として取り上げてきた質問への回答傾向にはあまり変化がみられていない。

素朴な宗教的感情というような調査は、内容が漠然としている一方、敏感な人には宗教的な内容がひっかかる。質問文の一字一句、質問票構成に難しさがある。比較という視点での一定の質問文を作成するに至っておらず、その都度変更が加わることも避けられない。また調査対象や、調査方式なども確定できない。こうした調査の結果を、あれこれ考察しながら比較することが必要であり、本稿では、それを試み、1990年代に比べて、信仰を持つ人も宗教的な心

は大切と思う人も減ってはいるが、内容は違ってきても、素朴な宗教的感情ともいえる何かを持っている人はあまり減っていないと考えられることを示した。

量的調査の結果の比較においては、統計的検定を行ってそれで結論を示そうとする向きがあるが、統計的検定の前提への配慮がなく、特にこうした社会調査の現状を考えれば、検定結果が意味をなさない場合が多い。理論に頼らずに、データの状況を把握することも大切と考えている。

#### 【参考文献】

- 統計数理研究所国民性国際調査委員会，国民性七か国比較，1998，出光書店
- 林知己夫編，ノンメトリック多次元尺度解析についての統計的接近，1979，文部省科学研究費(一般研究B)報告書
- 林知己夫・西平重喜・野元菊雄・鈴木達三，比較日本人論，1973，中央公論社
- 林知己夫・林文，国民性の国際比較，1995，統計数理 43-1 27-80 頁
- 林文，宗教と素朴な宗教的感情，2006，行動計量学 33-1 13-24 頁
- 林文，現代日本人にとっての信仰の有無と宗教的な心 - 日本人の国民性調査と国際比較調査から - ，2010，「特集 日本人の国民性調査研究 - 平成の二十年 - 」研究ノート58-1 39-59頁，統計数理。
- 林文，伝統的価値観と身近な生活意識に関する意識調査報告書 - 別冊 - ，2011，2008 年度～2010 年度科学研究費(一般C)，2053049050 林文編，日本人の自然観 - 自然環境破壊に対する意識の根底をなすもの - ，1996，原子力安全システム研究所ワークショップ(1993-1995) 研究報告書
- 林文・吉野諒三，伝統的価値観と身近な生活意識に関する意識調査報告書 - 郵送調査と各調査機関の WEB 調査の比較 - ，2011，統計数理研究所
- 吉野編，東アジア価値観国際比較調査 - 「信頼感」の統計科学的解析 - 総合報告書，2006，統計数理研究所
- 吉野編，環太平洋国際比較調査 - 東アジアと周

辺諸国の「信頼感」の統計科学的解析 - ，2010，総合報告書，統計数理研究所

注) 統計数理研究所の日本人の国民性調査、各種国際比較調査については当研究のホームページ (<http://www.ism.ac.jp>) を参照ください。

#### 筆者プロフィール

林 文(はやし ふみ)

日本女子大学家政学部卒業。統計数理研究所を経て 1989 年から東洋英和女学院大学。1996 年から 2012 年 3 月まで教授を務める。現在、社会調査協会副理事長、東洋英和女学院大学非常勤講師。

主な著書に、「統計学の基本」(共)、「国民性七か国比較」(共)、「調査の実際」(共)、「国際比較データの解析」(共)、「社会調査ハンドブック」(共)、「統計応用の百科事典」(共編)などがある。

